opusdei.org

黙想の祈り:聖マタ イ(9月21日)

黙想のテーマ:「マタイとイエスの出会い」「困難の中で 私たちを導く愛」「自分が罪 人であることを認める」

マタイとイエスの出会い

困難の中で私たちを導く愛

自分が罪人であることを認める

「イエスは徴税人をご覧になり、愛され、そして彼をお選びになった」

m。聖べダのこの言葉は、あらゆる 召命の本質的な特徴を要約していま す。すべての召命において、主導権 は常に神の側にあり、神は永遠の昔 から私たちのことを考えてくださ り、私たちの一歩一歩に伴われま す。マタイの場合、イエスはマタイ が税金を徴収している場所を通りか かり、彼を見てその場で呼ぶことを 決断されます。召命の神秘です。マ タイは自問したかもしれません。な ぜ私なのか?なぜ今なのか?自分に 必要な資質があるのか?この選択は 私をどこへ導くのだろう?彼は徴税 人であり、社会からは公然の罪人と して見られていました。しかし彼の 物語を読むと、こうした懸念はどれ も決定的なものではないことがわか ります。マタイの場合も、そしてど んな人の召命の場合も、重要なのは キリストとの個人的な出会いだけで す。キリストはご自身の救いの計画 に協力するよう、私たちを招いてく ださる方なのです。

「私に従いなさい」。イエスはマタ イにひとこと言われました。それ は、ただイエスについてくるように という誘いではありません。「『私 に倣いなさい』と言っておられるの です。『わたしに従いなさい』と言 われましたが、単に足跡だけでなく その生き方についても言われたので す。キリストのうちにとどまると言 う者は、キリストが生きたように生 きなければならないからです | 121。 このようにしてマタイの人生は、そ のすべての意味を見出したのです。 彼は自分の存在全体を新しい目で見 るようになり、寛大に対応するため に必要な、暖かさと力をも与える光 で見るようになったのです。聖ホセ マリアは述べています。「どのよう にして神の呼び掛けを感じ、どのよ うにそれを知るかと、お尋ねなら、 それは生活を新たな目で見るように なることだとお答えしましょう。内 的に光が灯されるのです。それは神 秘的な衝動であり、人をもっとも高

貴な活動に情熱を傾けさせ、その実現を後押しし、それが任務となります。この強い活力は雪崩のようにすべてを巻き込みます。これが召し出しと呼ばれるものです」[3]。

マタイは、キリストの呼びかけに一 瞬のためらいもなく応えました。福 音書は、「彼は立ち上がって、イエ スに従った | (マタイ9・9) と簡単 明瞭に述べています。情報は簡潔で す。彼が以前からイエスが話すのを 聞いていたのか、それともそこに住 み、働いていたカファルナウムで、 イエスと話したことがあったのかは わかりません。この箇所で簡潔に強 調されているのは、彼が自分の人生 を分かち合うようにとの呼びかけを 受けるやいなや、主に従う敏捷さで す。私たちはアンデレとペトロ、 フィリポとナタナエル、ヤコブとヨ

ハネといった他の使徒たちの場合にも、同じようなことが起こっているのを見ています(参照:ヨハネ1・40-50、マタイ4・18-22)。

あの素朴な漁師たちや徴税人マタイ が、キリストにすぐさま従ったのは なぜでしょうか。明確な答えを出す のは容易ではありません。彼らがど のような人物で、どのように考え、 どのような夢や希望を抱いていたの か、私たちはほとんど知りません。 しかし福音書に書かれているのは、 イエスが彼らの心に触れたというこ とです。イエスは、ご自分がこの世 にもたらした愛を鮮明に感じさせま した。そしてこの発見は、彼らに抗 いがたい喜びをもたらしたのです。 「すべての真の召命は、私たちに新 しい喜びと希望を与えてくださるイ エスとの出会いから始まります。そ して試練や困難を通して、私たちを ますます充実した出会いへと導いて くださるのです | [4]。

マタイはイエスに心を奪われまし た。彼はイエスの近くにいること は、この世が決して与えることので きない幸福を与えることを経験しま した。おそらく、イエスに従って過 ごした数週間に、誰もが同じように 心を開いてイエスを受け入れるわけ ではないため、困難があることを 悟ったでしょう。おそらく彼はま た、イエスの使命とは対照的に、自 分自身の限界や過ちを認識するで しょう。しかし、マタイは悲観論よ りも希望を選び、イエスへの愛を守 り、必要であれば何度も清め、新た にすることができると確信しまし た。「イエスを熱愛する人たち。確 かに人生には試練があり、寒さや逆 風にも負けず、多くの苦しみにも負 けず、前進しなければならない瞬間 があります。しかしキリスト者は、 かつて彼らを燃え立たせた聖なる火 へと続く道を知っています。 (…) 神は、現実をよく認識しながらこの 人生を旅する私たちが、神のように

神とともに夢を見ることができるようになることを望んでおられます」
^[5]。

収税所でイエスに会った後、マタイ は自分の家で宴会を開くことにしま した。イエスに会うために友人たち を招待することで、自分の新しい人 生を祝おうとしたのです。彼らの多 くは、マタイ自身と同様、ローマ帝 国と協力していたため、公然の罪人 とみなされていました。「ファリサ イ派の人々はこれを見て、弟子たち に『なぜ、あなたの先生は徴税人や 罪人と一緒に食事をするのか』と 言った | 。しかしこの言葉を聞い て、イエスはなぜご自分がこの世に 来られたのかを明らかにされます。 「医者を必要とするのは、丈夫な人

ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐みであって、いけにえで

はない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、 正しい人を招くためではなく、罪人 を招くためである」(マタイ9・ 10-13)。

自分を正しいと思う人は、神への扉 を閉ざしてしまいます。しかし、自 分を罪人であると認める者は、キリ ストに近づき癒していただくことが できます。神が私たちに求めておら れるのは、過ちのない、汚れのない 人生ではなく、悔い改め、へりくだ る心なのです。これこそが、私たち が神に捧げることのできる最高のい けにえなのです(詩編51・19参 照)。「私たちは、もろく壊れやす い哀れな土の器です。しかし、神は 私たちを永遠にその幸福で満たすた めに創造されました。そして、私た ちが皆にその喜びを広げることがで きるよう、地上において今すでに、 神は私たちにその喜びを与えてくだ さっているのです | 「6」。 私たちが人

生において、神のあわれみと癒す力を体験することができるよう、聖母にお願いしましょう。特に赦しの秘跡と聖体拝領において、神の絶大な愛の証人となるよう、私たちを駆り立てる恵みを受けるのです。

- [<u>1]</u> 聖ベダ・ヴェネラビリス、説教 21。
- [2] 同。
- [3] 聖ホセマリア『手紙3』9番。
- [4] フランシスコ、一般謁見演説、 2017年8月30日。
- [5] 同。
- [6] フェルナンド・オカリス『福音の光』(A la luz del Evangelio p. 286)。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-sei-matai/ (2025/12/16)